

教科書の中の君主政体

——清朝末期における倫理的・政治的知識の普及

P. ザルロー 著
石山真由、孫江 訳

はじめに

近代社会において、教科書ほど「公的知識」をよく示すものはおそらく存在しないだろう。実際、社会的、政治的エリートによって、教科書は効果的に教師の自由を制限し、教育内容における均一性をもつことを課し、青少年に対する大衆教育の基礎作りに利用されたことにそれは現れている。教科書は、限定されているものの、知識を分け与えることと、青少年を社会貢献者の一員として適応させることの、二つの目的のためのものであることは明白である。当然ながら、歴史的に見ても、公式、非公式を問わず、中国の多数の教育機関において、現在我々が教科書と呼ぶものを使用してきたわけだが、これは国家規模の大衆教育制度が具体化し始めた20世紀初めになってからのことである。清朝の新政改革においては、その初期にあたる1902年から教育を重要な課題とし、また1904年の教育章程の実施とともに、多くの近代的学校も出現した¹。

知識には体制の正統化を脅かす可能性があり、知識普及と青少年の社会化という二つの目的はある意味で緊張関係にあったともいえる。ポスト啓蒙時代には、知識の生産における思索が物事の伝統的なやり方への挑戦を確かに表し、新しいやり方に専念する若年層を作り出すということは避けられないものであっただろう。同時に、自然科学における知識人たちは倫

1. Hiroshi Abe, "Borrowing from Japan:China's First Modern Educational System", in Ruth Hayhoe and Marinanne Bastid,ed., *China's Education and the industrialized World* (New York:M.E. Sharpe,Inc.,1987),p.61. これについての簡潔なコメントは以下の論文を参照。Marinanne Bastid, "Servitude or Liberation:The Introduction of Foreign Educational Practices and Systems to China from 1840 to the Present," *idem.*,pp.3-20.

理的知識と政治的知識の真の概念に対する疑問を投げかけた²。倫理は学校で教えられるが、科学的知識といったものには欠けている。

すべての近代社会において、知識生産とその普及は多くの中央機関にとって重要な課題である。清朝末期の中国においては、倫理的知識と政治的知識は長い間一体化していた。特に清朝のイデオロギーは、複雑ではあるが、儒教の等級制度で固められた倫理的認識が確実に込められていた³。長い間中国の政治体制の中央機関であった朝廷は、1905年になるまで科挙を続けた。そして科挙が廃止されることで、すでに大きな変化にあったといえる知識制度は重大な局面を迎えたのである。しかしながら、当時はまだこの危機はそれほど認識されていなかった。新しい西洋の知識を「輸入」することで、主要な官僚たちはこれに気づき、伝統的な倫理的知識を強化する必要性を感じたのである。しかし、彼らはこの時、君主政体の基盤をも含む倫理的知識とこの新しい知識の間に生ずる矛盾に全く気づいていなかった。実際、学部は、この二つの知識制度は共存できるだけでなく、相互に支えあうものであるとまで主張したのである。政治的価値の観点からすれば、国家への忠誠は皇帝への忠誠であった。

清末以前にも「忠誠」といった類の知識は深く議論されていた。教科書の編者たちは、高官たちとは異なり、王朝への忠誠心を引き合いに出し、愛国心というものを強調したかったのかもしれない。同時に、過激論者たちとも異なり、君主政体を直接非難することもできなかったし、彼ら自身を清朝の忠臣であると見なしていた。こういった観点から見た愛国心は、朝廷に対して忠実でないことを意味するわけでもなければ、必ずしも王権に対する伝統的な賛美を含意したわけでもなかった。さらに言えば、実際の教科書の内容は政府のねらいを示しただけで、編者の意図したことを必

2. この点においては、筆者は社会進化論や理性による選択などの科学的次元で道德行為や政治行動を理解しようとせず、特殊な道德と政治体制を「真実」(truth)のように同一視する。

3. 指摘しておきたいのは儒教と君主制の間に緊張があるということである。以下の二つの著作を参照。Pamela Crossley, *A Translucent Mirror: History and Identity in Qing Imperial Ideology*(Berkeley:University of California Press,1999)。Evelyn S. Rawski, *The Last Emperors: A Social History of Qing Imperial Institutions*(Berkeley:University of California Press,1998)。また、儒教と君主体制の間の緊張について、Levensonも指摘した。Joseph Levenson, *Confucian China and its Modern Fate: A Trilogy*(Berkeley:University of California Press,1972),Vol.2,pp.25-73。

ずしも示していたわけではないのである⁴。以下で考察する歴史教科書の中に、歴史的知識が倫理的知識とともにかなりの緊張状態にあったことがうかがえる。

一、政府の目的

学生が実際に何を吸収したのかを教科書から知ることはできないが、社会的エリートたちが何を学生に学ばせようとするのが大事だと考えたのかは認識できる。同様に、教育制度に対する政府の目標から、その制度が何を達成したのかを知ることはできないが、政府が何を望んでいたのかは読みとれるのである。清末における社会的エリートたちは激しく分裂していた。新しい学校の関係者の多くが、清朝のこの関心事のすべてについて理解を示さず、また、一部は完全なる革命者であった。それでもやはり、朝廷の関心事は官僚の関心事であり、そして官僚は保守的改革派に属する大きな集団の代表であったのである。彼らはこの倫理における新しい教育制度に根拠を与え、倫理教育を基盤の一つとし、全ての学年に課した。倫理は、愛国心や君主への忠誠と、儒教の修身を結合させた。そして、これらの目標が反論されることはなかった。

これらの目標は1906年に学部によって公表された「教育目標」に基づいて始動された。学部の文書により、改革を促すと同時に、急進的な改革が批判された。学部がとりわけ懸念したのは後者の方で、それは西洋が悪い模範だったと主張するのではなく、学者たちが西洋を正しく理解していないのではないかというものだった。大衆教育は結局のところ、忠誠心を植えつけ、革命的異端に対抗するための手段であり、また国民を動員することで国家統治の強化を行うためのものであった⁵。

さらに、学部は、適切な政策というものは、「中国」の状況と国民の習慣に基づいた上でのみ設けられるものであると主張した。とりわけ、伝統

4. 一体どのぐらいの生徒が教科書の内容を吸収したのか、これは本文の論じる範囲を超えたのである。

5. 璩鑫圭、唐良炎編『中国近代教育史資料匯編』学制演変、上海人民出版社、1991年、第一巻、534～539頁。

的国家原則（政教）は皇帝への忠誠（忠君）と儒教の崇敬（尊孔）から成り立つものであった。これらの基本原則を維持するために必要なのは、公共心（尚公）・武力（尚武）・実用的技芸（尚実）の尊重であった⁶。学部は、西洋の理論を真似し、それまでの中国の道徳的制度を廃止するという流行の観念は混乱を招くだけであると示唆した。同時に、東洋と西洋の国々の政治形態は異なるものの、政治の基盤となっているのは常に国王への崇敬であることに変わりはないと主張した。例えば、当時のドイツの隆盛は、帝国の統一を保つことに基づいた教育のためであったと言えるだろうし、日本の隆盛においては教育における帝国構想の強調と関係していたであろう。学部のいうところの、慈悲深く思いやりのある清朝は、反清革命者によって脅かされることはあったものの、これらに類似した教育制度を具体化することができた。

学部は、一般国民の国家に関する知識が乏しく、また彼らがそれに無関心であるということから、当時の教育制度の欠陥を認めざるを得なかった。これは、人々が自覚していなかったためではなく、それを意識させ教育する方法が存在しなかったためである。忠誠の精神というものは存在していたが、正しく機能していなかったのである。しかし、日本における教育を見ると、それは小学校を通して一般国民にも行き届き、国家の屈辱をぬぐい去ることの必要性、また天皇の幸福は国家の栄光であり、国家の栄光は自身にもつながってくるということを全国民が学ぶこととなった。学部の言葉によれば、これこそが、指導者と国民の一体（君民一体）の意味するところであった。礼儀の国としての中国では、この個人と国家（そして皇帝）の一体化を一般教育を通して発展させることは容易であった。教科書は国家の歴史、起源、長期にわたる発展、最近の出来事、皇帝の懸念事、そして外国からの圧力による問題や国内の問題を強調した。学部は、そうすることによって、生徒たちが皇帝に対する忠誠を決して忘れることはなく、そして、先の英雄たちの偉大な功績と秩序への恩恵を覚えることは、反清革命を防ぐことにつながるだろうと考えたのである。

学部にすれば、公共心・武力・実用的技芸はつまり、これらの根本的な

6. 同上、535頁。

目標を達成するための方法であった。しかしながら、学習課程や授業時間を考えると、ただちに実行できる目標を学校設立者に提供する必要があった。公共的忠誠心の団結が確固とした統一を生み出すのである⁷。学校の役割はきわめて重要なもので、生徒たちは授業で修身、倫理、歴史、地理などを学ぶことを通じて信頼と友情を育み、これらの全ての過程はその協調性を促すものであると学部は断言した。こういった意味で、歴史のような知識や修身のような倫理は、個人の中で完結してしまうのではなく、国民の結束に役立つものであったと言える。孔子が普遍的慈悲心は親孝行の精神の延長であると説いたように、愛国的結束は幼少期に根付かせるものである、と学部は主張した。このような結束は、衰退していた「国学」の復活による自己啓発や親孝行の精神から生まれたのかもしれない。今日の退廃した社会では、村々から家族までの単位まで様々な分裂が起り、利己心が国の再結束にかかっているわけで、つまり徳徳や協調性（団体）といった観念を理解させる必要があった。こうして、学部は、生徒たちに他者を自分と同等に捉え、同じように、国家を自分の家族のように愛することを学ばせようとした。

学部のいう学校教育における他の二つの柱は、軍事教育と実用的技芸であり、これは忠誠心よりも即効性のあるものであった。また、西洋における軍事は支配者と人民を結束させるものである、と注目している。こうしたことから、清朝の教育課程において軍事教育は重要なものとなり、体育の授業で軍事的訓練を行うだけでなく、軍事教育を文学、歴史、地理、また美術や音楽の授業にまで取り入れた⁸。実技の授業においては、明の王陽明や清の曾國藩といった軍事にも長けていた学者が例に出された⁹。この観点から見た教育では、明確な行動規範は技術といったものが問われていたわけである。

学部の文書は、進歩主義を食い止めているかのような保守的な声明であると言えるだろう。学部は、西洋においても必ずしも進歩主義が保守主義

6. 同上、535 頁。

7. 同上、536 頁。

8. 同上、537 頁。

9. 同上、538 頁。

よりも価値をおかれているというわけではないと主張した。また、これにより儒教の教えを傷つけることになるのではないかという議論もなされた。どの国においても、教育はその国の言語、文学、歴史、習慣、宗教に基づいて行われるもので、それは国家を保護するためであり、実質的には国家の教えを尊重しているものであるといえる¹⁰。再び、日本が適切な例となる。明治の王政復古は、尊皇の名の下で行われたものだが、これはもともと中国から学んだものであった。このことから、学部は、日本と同じように中国においても、儒教こそが教育にふさわしい基盤になると示した。日本は、中国から学んだことで物質的な発展を遂げたわけだが、それは青少年の忠誠心を育むことにもつながったのである。

1906年、学部は、国の義務教育制度は帝国や皇帝を保護するためのものではなく、強大な国家をつくるためのものであると正当化した。しかし、ここにおける帝国と国家の区別には示されなかった。また勅命においては、これを「君民一体」と、家族を守るといった意味での愛国心であると要約した¹¹。それはまるで、政府が教育から全ての物事がうまく進むと信じているかのようであった。結束と忠誠心の名のもとに、学校教育は利己心の根絶を促し、人々は裕福に、国家は強大なものになるというものだった。

Zheng Yuan が述べているように、国家の教育改革は明らかに儒教の理想の影響を強く受けている¹²。1901年の新政改革は明らかに儒教の社会的倫理観念に基づくもので、特に「三綱五常」は重視されている。政府の目的が「四書」や「五経」にあるのだと考えれば、歴史、政治や科学は二の次で、新しい教科の導入が重要になってくる。Ruth Hayhoe が指摘しているように、その新しい知識の分野は1902年に導入された。1904年から1906年の間の教育課程改正は、それまでの古典、歴史、哲学、文学といった教科をさらに広範なものにし、また、外国の歴史、地理、言語や自然科

10. 同上、535頁。

11. 同上、539頁。

12. Zheng Yuan, "The Status of Confucianism in Modern Chinese Education, 1901-1949: A Curricular Study," in Glen Peterson, Ruth Hayhoe, and Yongling Lu, ed., *Education, Culture, and Identity in Twentieth-Century China* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2001), pp. 193-216.

学、専門技術といった全く新しい教科も設けられるようになった¹³。

さらに、Zheng Yuan の言うように、「儒教の忠誠が衰退した君主政体の最後の柱であった」のなら、それは有力な柱であったのだろうか¹⁴。そして、清朝末期の知識改革において、儒教が君主政体を擁護していたのか、それとも君主政体が儒教を擁護していたのかを考える必要があるだろう。上記で示したように、学部が元来重要視していたのが孔子への崇敬だったのに対し、政府の命令では皇帝への崇敬が最優先であるとされている。それまでは儒教が王朝の柱だったのが、王朝が儒教を擁護するものになったといえる。また、全体的に見て崩れることのなかった社会的政治秩序こそが中国であるというのが政府の見解であったと理解すべきであろう。一方で、政府の教育方針である儒教と忠誠心というこの明確な結合が自然で理にかなったものであると考えるのは正しくない。しかし、清朝政府にとってこれはいたって自然なことで、君主政体を考慮しない「三綱」や自己修養を認めることはできても、儒教なしの君主政体を切り離して考えることは不可能であった。この頃には、革命家たちにより、国家への忠誠（愛国心）と皇帝への忠誠の違いが明らかになっていた。しかし、官僚たちはこれに反論し、二つの忠誠心は一体両面のものであり、強大な国家建設の過程において教育はこれを実現させる重要な手段であると考えていた。

二、教育目標の設定

暗示的ではあったが、これより2年前の1904年にはすでにこの教育規定の多くの目標が示されていた。子供たちは七歳で正式な学校教育を始めることとなった。そして、小学校の初期課程においては、生徒の知識、倫理関係、愛国心、発育が強調された¹⁵。その規定により、倫理教育では、時には歴史的な模範人物を用いて、徳性を養い、悪行を防ぎ、善行を習慣

13. Ruth Hayhoe, "Cultural Tradition and Educational Modernization: Lessons from the Republican Era," in Ruth Hayhoe, ed., *Education and Modernization: The Chinese Experience* (Oxford, Pergamon Press, 1992), pp. 51, 71, n. 11.

14. Zheng Yuan, "The Status of Confucianism in Modern Chinese Education, 1901-1949: A Curricular Study," p. 202.

15. 璩鑫圭、唐良炎前掲書、291頁。ここでは日本の教育制度から影響を受けた。Hiroshi Abe, op. cit., p. 294.

付けることを学ばせること。そして、この時期に子供たちに人類を愛する心（愛同類）を学ばせることは、大人になってからの愛国心（愛国家）への基礎となったのである¹⁶。初等教育はこうして修身と古典を強調した課程のもとに始められ、『孝経』、『四書』、『礼記』に焦点があてられた。実際のところ、読み書きを学ぶことが中心で、他にも数学、歴史、地理、理科、体育、美術や工作の授業もあった。これらの全ての教科において倫理教育が行われたわけではないが、歴史においては確실히行われたといえる。ここで、重要な教育目標となるのが、「聖主賢君」の偉業を伝え、中国文化の起源や「現在の王朝」の徳政を学びとることによって、国家への忠誠心（国民忠愛）を育てることであった¹⁷。

歴史の授業は、生徒たちに張り合いをもたせるために、それぞれの地域の歴史や地域の道德者から始められた。同時に、壁には王朝の統治を示す年表がかけられ、生徒たちが自然に記憶できるようにした。子供たちを、身近でよく知っている場所とそれよりも大きくて抽象的な政治社会の両方に根付かせようと努めたわけだが、意識的に行われたのかというかはともかく、これにより、地方と国家（帝国）が関連づけられることとなった。

新しい学校教育のための学習課程は1904年までにはそのほとんどが完成していたものの、細部まで完結したのは1906年で、ここから政府の目的をさらに読み解くことができる¹⁸。清朝政府の見解がそうであったかどうかは定かではないが、おそらく、最も重要だと考えられていたのは、初等小学校の教育であろう。初等教育は、高等教育に進む前の、基礎知識を身につけるためのもので、何かを生み出すというよりは、その準備段階にあるものだと考えられた。しかしながら、それは莫大な数の人民に影響を与えることのできる絶好の機会であり、この段階の教育は、生徒たちの興味を引くことが求められ、後の教育の基礎を形成することになった。いずれにせよ、初等教育では、倫理、古典、中国文学、算数、歴史、地理、理科、そして体育が課された。地方の学校においては、それに美術や手工を

16. 藤森圭、唐良炎前掲書、294頁。

17. 同上、295頁。

18. 商務印書館編『大清新法令』、1909年。学校のレベルは以下のように分類した。初等小学（1～5年）、高等小学（6～9年）、中学堂・初級師範学堂（10～13年）、高等師範学堂（14～16年）、大学および孔子学院（17～19/10）。

加えることもあった¹⁹。倫理の授業では、朱熹の『小学』や、劉宗周の『人譜』を基に、具体的な行儀、品行が取り上げられた。また、教師たち自身が模範となることも求められたし、写真や絵、詩や歌などを用いるなどして、よい行いとは何かを学ばせた。最終的な目標は生徒たちの良心を喚起することであったのである²⁰。

古典の授業では、一年生は簡単な説明を用いて一日に40の文字を学びながら、『孝経』や『論語』の古典を学ぶこととなった。二年生では、一日に学ぶ文字の数は60になり、三年生になると一日に100の文字を『孟子』から学ぶことになった。四年生は、『孟子』を続けるとともに、『礼記』も始め、一日に100の文字を学ぶことになった。すべての書物において、教師たちは口語体で分かりやすい説明を行うこととされた。

歴史の授業では、初めの二年間は、生徒たちはそれぞれの郷土の歴史について、特にその地域の著名な人物について学ばされた。三年生、四年生では、特定の王朝や統治、また「聖主賢君」の偉大な功績について学び、五年生では清の成立とその「仁政列聖」の正史について学んだ。同様に、地理の授業でも、ローカルなことから始まり、一年生、二年生は、その地域の道路、村、山、川から寺や重要人物といったものに焦点をあて、三年生では県や府、そして中国に関することを学ぶこととなった。四年生では中国の領土、有名な山々や川などを中心に、五年生では中国とその近隣諸国の両方を視野に入れた²¹。こうして、生徒たちは中国が世界のどこに位置するのかを、まずは国境の位置が表されることで理解することになった。歴史と地理の授業はともに愛国心を促し「国民忠愛」を助長するためにつくられたものであった²²。学部は、近代愛国精神は、はっきりと認識できる郷土地域に対する感覚から、地図に表されるもっと曖昧な領域への感覚への延長にあると考えていたようだ。

高等小学校の課程も似たようなもので、倫理、古典、中国文学、算数、中国の歴史、地理、理科、美術と体育が課され、これ以上高い教育を受け

19. 前掲『大清法令』7:2:2 b。

20. 同上、7:2:3a。

21. 同上、7:2: 5 a-6a。

22. 同上、7:2: 4a-b。

ない生徒は、農業や、手工芸、商業の授業が加えられた。倫理の授業での最初の目標は、冷静さや調和の精神ともいえる「自制心」を教育することであった。生徒たちは倫理規範を修得することが求められ、それが身についたかどうかは彼らがどれだけ学校生活において従順であるかで判断される。利己的な感情をコントロールするだけでなく、他者との関係も考え、「仁義」や「友愛」といったものを身につけなければならなかったのである。これが、個人的な関係から国家や世界の範囲にまで、徐々に発展することになったのである。また、倫理の授業は外国の教育制度においても課されているものであると、明確に示している。

古典は倫理とつながっていて、高等小学校四年間のすべての学年において朱熹の『四書集注』を教科書にして教育された。さらに上の中学校になれば、生徒たちはこの難解な四書を追究することができたが、まだこの小学校の段階では、教師たちは具体的な道徳的行為を強調し、教科書は分かりやすく説明する必要がある。小学校の生徒たちは、まずは、自己を高め、社会の習慣を学ぶことが求められたのである²³。

中学校における歴史の授業は、黄帝や堯や舜の時代からの王朝の盛衰についての内容だった。同時に、この循環的な考え方は、「治乱」や世界的な流れというものを強調することで修正された。また、歴史の授業は明らかに、清朝への忠誠を尽くすことが意図されており、政府からの恩恵や自己向上に努めることが学ばされた。地理の授業も同様に生徒の精神を強化するものであった²⁴。

中学校や初等師範学校の段階になると、道徳、古典、中国文学に、外国語が加わるようになった。そして、歴史、地理、算数、理科、法律、経済、美術と体育も課された。倫理の授業で教科書となったのが、陳宏謀の『五種遺規』であった²⁵。これは、1) 道徳心、2) 向上心、3) 女性、4) 政治、5) 役人の心得・教育、を扱っている。内容が高度であるため、進

23. 同上、7: 1 : 80b。

24. 同上、7: 1 : 81b。

25. 陳は西南非漢民族の教育に力を入れた著名な官吏である。以下の論著を参照。William T. Rowe, "Education and Empire in Southwest China: Chen Hung-mou in Yunnan, 1733-38," in Benjamin A. Elman and Alexander Woodside, ed., *Education and Society in Late Imperial China, 1600-1900* (Berkeley: University of California Press, 1994), pp. 417-457.

んだ生徒に適しているものだと考えられた。陳の言葉は分かりやすいものであったが、彼の論証はきわめて厳密で複雑なものであった。この教育は中学校五年間すべてを通して行われ、生徒たちに、道徳心を身につけ、偉大なことをしたいという願望を抱かせることとなった。生徒たちは、この倫理規範を、家族や友人、そして中国や世界と自らの関係にどのように取り入れていくのか、またそれをきちんと実行するということを学ばされた²⁶。

中学校の歴史では、「王朝の偉大な功績と統治」を挙げて、まずは清朝の「王の徳政」、そしていままでの進歩と偉業、優れた学者と忠臣の精神について、彼らの活躍や技量、古い軍事制度の見直し、農業、産業、商業における進歩、慣習の変化などが取り上げられた²⁷。そして、アジア諸国の歴史から始まり、ヨーロッパ、アメリカまで扱われた。この段階での歴史教育は異文化の起源やそれぞれの関係を教えるためのものであった。こうして、生徒たちはなぜ世界には力のある国とそうでない国があるのかを理解することとなったのである。ここでもまた、最終目標は国民の志気を高めることであったといえる²⁸。

中学校の段階での古典の授業は、自己啓発的要素よりも歴史に重点をおいていたようである。『春秋』、『左伝』、『周礼』はどれも経世のために有効な原典であると考えられた。これらは、古代周の高官たちの精神や勇敢な英雄たちを挙げ、かつての皇帝がどのように人々を養い、今日の政府をもたらすこととなった教育を行ったのかを示している²⁹。地理の授業では、国境を越え、地球と人間の関係、気候、人種、経済活動、地図の書き方が含まれるようになった。しかし、依然として、外国地理の教育の焦点は愛国心を植えつけることにあったようである³⁰。中学校の教育課程から初等師範学校にかけては教育方法が加えられただけである。

高等学校の教育課程は、人文、科学、医学の三つの専門課程にも分かれ、その全てにおいてまず重要視されるのが人倫道徳であり、古典、中国文学、外国語、体育はすべての課程に含まれていた。そして、人文課程では歴

26. 前掲『大清法令』7:1:72a- b。

27. 同上、7: 1 : 73。

28. 同上、7: 1 : 74。

29. 同上、7: 1 : 72b-73a。

30. 同上、7: 1 : 74a。

史、地理、法律、論理学などが、科学課程では数学と様々な科学分野の教科が、医学課程ではラテン語、数学、生物が、それぞれ専門科目とされる³¹。人文課程の倫理の授業では、三年間を通して、宋、元、明、そして清（国朝）の学者を採り上げて、人間や日々の生活の本質を問うことが教えられる。他の二つの課程においては、類似はしているものの、おそらくそれほど重要視されず、帝国末期の哲学者たちが取り上げられた³²。高等師範学校の教育課程は、『礼記』や『勸学篇』などの教材が加えられた³³。ここでも、教師たちは具体的で分かりやすい基本的な意味を強調することが求められ、これらの複雑な文献のすべての詳細にわたって説明する必要はなかった。しかし、すべての授業において、常に道徳倫理を強調しなければいけなかった³⁴。

この倫理の強調は、専門学校においても同じで、数学、気象学、農業などの専門分野においても、常に基礎に置かれるものであり、その課程において終始続けられた³⁵。さらに上級の専門学校では、中等学校の倫理教育と同じ、宋・元・明・清の学者たちについて学ぶことまであった³⁶。

この時点での教育は、まだ男子を対象にしたものであった。しかしながら、清朝の規定では、三歳から七歳までの子供たちのための家庭教育（家教）と保育園（保姆・蒙養院）についても触れられている。女子用の教科書には『孝経』、『四書』、『烈女伝』、『女誡』、『女訓』、『教女遺規』が用いられた³⁷。この段階では、女子生徒は新しい知識を学ぶことを課されておらず、女子への正式な教育は1907年になって実施されるようになった³⁸。

31. 同上、7: 1 : 64a。

32. 同上、7: 1 : 64b-65b;7:166a-69b。

33. 同上、7:2 : 15a。

34. 同上、7:2 : 22a。

35. 同上、7:2 : 36b,39a。

36. 同上、7:2 : 54a-56a,56a-b。

37. 同上、7:2 : 12b。清末期の女性教育について以下のものを参照。Joan Judge, "Citizens or Mother of Citizens: Gender and the Meaning of Modern Chinese Citizenship," in Merle Goldman and Elizabeth J.Perry, ed., *Changing Meanings of Citizenship in Modern China*(Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002), pp.23-43; and Judge, *Reforming the Feminine: Female Literacy and the Legacy of 1898 Reform Period: Political and Cultural Change in Late Qing China*(Cambridge, MA: HUAC, Harvard University Press, 2002), pp.158-179。

38. Joan Judge, "Citizens or Mother of Citizens: Gender and the Meaning of Modern Chinese Citizenship," p.29。

女子教育は、これらの書物が示すほど伝統的なものにはなり得なかったが、政府の関心は示されている。

清末期における教育は、こうして倫理教育が重要視されたわけだが、これは学部が意図したように子供たちに反清革命に対抗する精神を植えつけるためだけでなく、西洋の新しい知識それ自体の脅威に対抗するためのものでもあった。前述したように、学部は、この新しい知識は正しく理解される限り、伝統的規範への脅威となることはないと主張したわけであるが、ここにはまた別の解釈も可能であり、新しい知識が伝統的規範への脅威となるかもしれない、ということも暗示されていた。清朝末期の教育者たちは、今までの教育者と同じように、道徳的品行はどのような原因によっても妨害されるものではないと考えていた。しかし、この時ばかりは「自由と平等」という不安要素は、「三綱」の厳格な教訓と共同の忠誠心によって取り除く必要があるとされた。学校や教師がそれぞれの教科の教科書を選ぶことができたのは非常に意味のあることである。中には慎重を要する歴史の教材もあったほどである。しかし、倫理と古典の教科書については、政府によって与えられるようになっていた。では、この他の課程は伝統的な規範への挑戦となったのだろうか。皇帝への忠誠という基本原則はどうなったのであろうか。

三、教科書編者の目標

もしも学部や保守派の高官の目標が比較的明確であったのなら、教科書の編者たちもそれぞれの目標をもったであろう。1906年に公布された初等小学校の倫理における指導要領は、親孝行や女性の純潔を強調しているが、政治に関する記載は含まれていない³⁹。少なくとも、改革派であった蔡元培や張元濟の二人も急進的な姿勢を示してはいない。忠義の教えは危険を恐れず、それぞれの義務に従う勇気の下に営まれるものであると説いた。注目すべきなのは、よき時代には忠誠心などなくても人々は他者と喜びを分かち合うことができるが、困難の時代には忠誠心を呼び起こすこと

39. 高鳳謙、蔡元培、張元濟編『最新初等修身教科書教授法』、上海商務印書館、第二版、1906年。

によって、お互いが助け合うことができるということである。つまり、忠誠心は平和な時代には育成されたはずだが、危険な時代に見られるものであったといえる。教科書において皇帝への忠誠心も忠誠心の例のひとつであったわけだが、それは友好、または特別な意味での個人的な関係であると強調された。文学や歴史の中から例として挙げられたのが、張千載であった。彼は宋の忠臣、文天祥からの官職任命を辞退した人物であるが、宋の崩壊後、元によって文が投獄された際には同伴し、三年間にわたって面倒を見たという。そして文が処刑された後、彼の遺体を丁重に埋葬した。清の検閲官は当然この話を脅威だとは見なさず、これがただ個人的な忠誠心を示しているだけでなく、愛国心の教えをも強調している点を重要視した。文が捕らえられた時、彼は兵を率いて皇帝の救助に向かっていたわけだが（この話自体が忠誠心を示すいい例であるが、ここで取り上げるものではない。）、それこそが国家のために自身を犠牲にするもの（为国捐軀）であると示した⁴⁰。

一般的に、編者たちは、彼らが伝えたいと考える倫理的な政治観念を暗示するようなことはしなかった。彼らは、伝統と近代の混合した性格をもつものをつくりだそうとした。親孝行は、単に尊敬と従順に関するものではなく、その祖先は善行の模範になるものであった⁴¹。その活動力、勇気、自尊、また迷信的習慣の廃止や成功を収めるといったことは、この意味ですべて倫理的規範であると考えられた⁴²。言い換えれば、これにより生徒の自信や独創力といったものを奮起させたかったのである。同様に誠実さ、寛大さ、礼儀なども促されることとなった。

後に考察する歴史教科書の場合、編者はその目標を、国家の屈辱や喪失というものの意識をもたせるというものであった⁴³。丁宝書は、日本を模範としているというが、その主張するところは、中国人はその「歴史的視野」を広めていく必要があるということである。「祖先の国家」の起源を忘れてしまっていたところにもその必要性がうかがえる。丁は、国家の問題を、

40. 同上、6頁。

41. 同上、1頁。

42. 同上、2頁。

43. 丁宝書『蒙学中国歴史教科書』、文明書局、1905年、1頁。

一家の団結のための父親や祖父の功績を語る孫になぞらえた。この祖先の回想は、二種類の時代に基づく歴史を表すものとなった⁴⁴。一方で、調和と不和の周期的な動きを強調し、当時のヨーロッパによる中国侵略の脅威と結びつけることができた。同時に、歴史は、過去の発展の現象と、未来のそれとを物語るものである。丁の最終目標は、発展した文化と社会をつくることだった。彼は、生徒たちに道徳的規範を与え、外国からの中国への影響を示しながら、王朝の支配や領土の征服といった内容を調べていくことを提案した。

丁は、かつての漢人と非漢人との抗争を、当時の黄色人種と白人種とのそれと比較した。漢人・非漢人の問題から当時の人種の問題を考える際、満州人の問題に行き着いた。というのも、満州人は非漢人であるが、西洋の帝国主義に向かい合うことで、漢人との結束を求めようになったということである⁴⁵。また、丁は、中国が外に向かって開放することを強く主張したのである。中国の歴史から彼が読みとったのは、国の文明がだいたい同等の力をもっているときは、どちらかがもう一方を迫害することはできず、接触をもち、一定の競争を行うことで、お互いが発展することができるということであった。ヨーロッパの帝国主義に直面して、それに対抗するためにも、中国はその西洋の文明を吸収する必要があったのである。中国の子供たちは、国家を開放し経済的努力を続けることを学ばされ、青少年は、富国のために実用的なビジネススキルを教わった⁴⁶。

丁の世界主義は、政府の改革と調和していながら王朝への忠誠を顧みないものであった。丁が教科書にかける望みは、急進的とは言えないまでも、確実に反保守的なものであった。知識を発達させることは、愛国心を発達させることである。これは丁の理論である。しかし、学部のねらいと編者たちのそれとの間には相違があり、彼らが指示されたものと実際書いたものとは異なる点があった。

44. 同上。

45. 梁啓超「論变法必自平滿漢之界始」、「变法通議」、『飲氷室合集』（中華書局）文集、1：77 - 83。

46. 丁宝書前掲書、2頁。

四、実用中国歴史教科書

初等小学校における歴史教育では、かなりすっきりとした政治的語り口で、今日の学校教育とそう離れてはいないものだった。「国家」についてはあまり触れられておらず、一般的なことや皇帝に関することを扱っていた。漢人と非漢人の問題も個人の物語として取り上げられている。こうして、調和と不和の問題を中心にもってくることに成功したのである。また、美術や哲学についても扱っているが、これらは革命意識の発展に寄与することにはなっていない。中国の調和と不和の時代は周期的に入れ替わるものであるといえるだろう。不和は「乱」と結びついていて、君主政体は調和と結びついているので、倫理的正義も君主政体と結びつくことになるのである。

しかしながら、この前提は常に成り立つものではなく、矛盾もうまれる。教科書は、古代において西方から渡ってきた漢民族の話から始まる⁴⁷。ここで重要なのは、漢民族がその土地の人々を追いやったのではなく、彼らは遊牧民であったということである。それは、ある部族の長であった黄帝の政治的統一の基礎を築いたこと（定中国統一政治之基）に始まる。彼はこうして初代君主となり、文字、舟車なども制定した。丁のこの教科書では、伝統的な文明神話も歴史知識として扱われ、黄帝や「大聖之君徳」をもつ堯、舜、禹といった他の古代の王が取り上げられている⁴⁸。彼らの統治時代において帝国は平和であった。もし、丁がここで物質的文明の進化や政治的結束、および中央集権の意識を伝えた。しかしながら、この進化の歴史がうまくいったかどうかは定かではない。禹が君主制の父子継承を始めたということを淡々と述べながら、丁はそこで王朝の最初のよい王と最後の悪い王について触れる。

教科書の中では、徳による王位継承と相続による王位継承の対照が明確に示されていない。その後も創始者の王たちが特に「道德者」であったという記述があるわけでもない。禹によって建てられた夏朝は最終的には、

47. この説は章炳麟や劉師培などによって広く知られていた。最初に漢族西來說を提唱したのはフランス人 Terrien de Lacouperie。

48. 丁宝書前掲書、1～2頁。

商が禹の悪名高い後継者桀を倒すことで商朝に服従することとなる。無道の桀はすでに民心を失っていた。この話の重要な点は、新しい形の皇帝政治の登場である。湯の帝国を築いたのは軍隊によるものであった⁴⁹。丁はまた、徳と軍隊の力の例として、周の繁栄も挙げている。周公は侵入していた野蛮人を討ったことや、文物を発展させたことで称えられている。子供たちは、礼楽や文物から周の制度がどれほど素晴らしかったのかを学んだ⁵⁰。また、主な官僚機関や、井田税制、国家教育制度なども簡単に触れられた。

周の場合、その衰退は皇室の墮落のためではなく、野蛮人の侵入によるものだと示されている。たしかに丁は、この春秋戦国時代を戦争と混乱の時代であったと述べている⁵¹。この時には周の貴族たちはもう王を崇敬しておらず、代わりに彼らは自らの権力をかけて戦った⁵²。丁はそこから野蛮人の圧力と王朝の衰退との関係を20世紀初頭のそれと比較している。一方で、中国にこの時ほど「才能」のある人材が存在した時代は他にはなかった。そしてこれはもちろん孔子の時代でもあった。孔子こそが慣習を発展させ、父と子、君主と臣下といったそれぞれの正しい役割を示した倫理規範を確立した人物であるため、丁はここに明確な進化を見出そうとした⁵³。孔子の教えは孟子を通して伝えられることとなり、それが中国の政治原則（中国政教）や政治的学問（政体学術）の基礎となったのだと示した。さらに丁は、孔子自身が前例もなければこれからもない唯一の存在で、この時代こそが思想と言論の自由の時代であったと示唆した。知的、学問的繁栄はもたらされたものの、これらは丁のいう進化の構想とは異なった。また、おそらく教師たちが示唆することで生徒たちがすでに認識していると考え、丁は孔子が政教に関して述べたとされることに関して解説をしなかった。

しかし、丁は戦国時代のさまざまな謀反についての項目を設けたのだろうか。封建的、もしくは貴族的であったといえる周の時代から、中央集権

49. 同上、2～3頁。

50. 同上、7頁。

51. 「諸侯不復尊王」、同上、5頁。

52. 同上、6頁。

53. 同上、7頁。

化した君主制の秦までの移行を明確には示さずに、丁は、秦の天下統一と、その古い封建制度の撤廃を強調した。そして、秦は武力を用いて帝国を統一しただけでなく、「種族」を守りながら、領土も防衛したのである⁵⁴。丁は、秦が皇帝という称号をつくり、自らを始皇帝と呼ばせたその独裁的な傲慢さや、死後にも称号を与える制度を非難してはいるものの、もしくはそれを理由に、丁の目には秦の設立こそが真の帝国であると映ったように考えられる⁵⁵。この時、支配者の権力が極致に達したことで、その秦の残忍性により政治と学問の両方が衰退したのだらうと丁は考えた。結局この三代の統治方法は墮落したと丁は懐旧的にまとめている。

明らかに、丁はこの古代中国の歴史を語る際に、それを進化的枠組みに取り入れるのに苦勞した。(野蛮人の侵入に対する)防衛や、(野蛮人を追放し、領土を広げていく)繁栄という点から考えれば、この中央集権や統一といった動きはよい事であるように思われる。しかし、実際の政策はほとんどがそうではなかったのである⁵⁶。同様に重要なのが、彼が君主制を説明する際に直面したジレンマである。秦以降の皇帝を描くにあたり、丁は、彼れらの本質が徳よりも、基本的に道徳観念のない(道徳に反するわけではないが)軍事的能力にあったのではないかと考えたからである。丁が伝統的道徳を諦めたということは、秦の急速な衰退に関する記述にも表れていて、その原因は、創立者やその後継者に欠点があったからではなく、厳しい法律や重税に対する大衆の不满によるものであるとしている⁵⁷。

秦と漢においての道徳観念の欠如の疑いは皇帝に関する丁の定義を導いている。皇帝というものは要するに帝国を支配する者である。丁は、ほとんどの部分で、褒貶を避け、その論調はいたって客観的なものとなっている。しかし、それでも、丁は漢の初代皇帝を評価している。漢の建国者について、それは初めて一般人が「天子」になったものであったと記述している。漢の皇帝は、基本的に周の封建制度と秦の軍事制度を組み合わせる

54. 同上、10頁。

55. 同上。

56. 梁啓超も同じ問題に直面した。Peter Zarrow, "Old Myth into New History: The Building Blocks of Liang Qichao's New History," *Historiography East and West* vol.1, no.2(December 2003), pp.204-241.

57. 丁宝書前掲書、11頁。これに加えて、丁宝書は今日のいわゆる社会史に関心を示しておらず、彼はあくまでもリーダーに注目していた。

ことで、さらに安定した統一を図り、また宮廷儀式を復活させ（秦における皇帝への崇拜儀式にならったものである）、有能であれば平民でも雇った⁵⁸。これらすべてがよい事であったかは定かではないが、すぐに丁は漢における不明瞭な王位継承制の記述に移る。文帝は仁政を行ったが、これによって継承の際に大規模な貴族の反乱を招くことになる状態を作り出したともいえるだろう⁵⁹。反乱鎮圧のために秦の軍事制度を復活させることとなり、結局は封建制の崩壊につながるようになったのである。これが歴史の変革のテーマであると見なすこともできるが、丁がこの発展を賞賛に値するものだと考えたかどうかは定かではない。武帝の事例において明らかのように、中央集権にもそれなりの問題がある。丁は、武帝と秦の始皇帝は「英主」と述べている。一方で、武帝は学問を奨励し、帝国の領土を拡大し、野蛮人の脅威を寄せつけず、今日のトルキスタン、ペルシャ、インドにまで派兵を行った。これが、漢を丁が理想としたであろう国際的で開かれた社会にしたのである。外国との接触や仏教の伝来については後の章で扱う。

武帝の帝国の中央集権的性格は、匈奴の脅威に打ち勝つことで、種族を守り国家の力を発展させた（以保種族以揚国威）のだろう⁶⁰。しかし、丁によれば、彼は宮殿建設のために資源を浪費して犠牲を出し、結果として冷酷な役人たちは人々を酷使して私腹を肥やした。丁は後漢を含む後の漢の皇帝は帝国を再び安定化したと信じている。これに関して、王莽は篡奪者であり、君位を奪った後の改革はその時代に適していたとは言えず、匈奴との戦いに敗れ、大規模な内乱を引き起こすことになった⁶¹。それでも丁の皇帝に関する記述には不明瞭なところが残る。中国を守り、外国の影響へも開放的であった強力な皇帝たちは、学問の自由を支持せず、重い負担を民衆に押し付けるために、国政は困難に陥り、それは結果的に崩壊へとつながったのである。

丁は再び、漢が倒れた後の晋の天下統一を称えている。しかし、これも

58. 同上、12頁。

59. 同上、13頁。

60. 同上、16頁。

61. 同上、16～17頁。

一時的なもので、野蛮人の侵入が続いて起こったことで、この後中国は短命の王朝時代を迎えることとなる。丁は、ここから再び天下統一に成功した隋までの間、正統な継承制度を見ることはなかった、と示唆している。また、ここで再び、統一に対する評価が示されている。隋の文帝は儉約家で、「民治」を果たした⁶²。しかし、彼は偏執病的になり、忠実な大臣たちを左遷させ、皇宮を離れさせた。彼の息子がこの王朝の支配に終止符を打つことになるのだ。そして、丁は長期に渡る平和を築いた唐の建国者を論理的に支持している。彼は、唐が隋を倒し、かつての同盟国であったトルキスタンにまで攻め入ったことを軍事的征服であったとしている。丁にすれば、歴史的要点は、唐王朝がトルキスタンと親密な関係にあったことではなく、唐が最終的にトルキスタンを破ったことである。また、彼は高宗の「種族防衛と国威拡大」(衛種族張国威)を称えており、これこそが皇帝政治の本質だと考えるものであった。遠方との貿易からの利益をあげ、その国力と威勢は南方や西方にも拡大したことから、丁は唐が国際的に開かれた社会であると述べている。また、彼は指導力の不足を暗示することで、唐の衰退の原因は外国からの圧力というよりも、政府の派閥の内部抗争によるものだったと示している。

もしもすべての皇帝が(実際そうであったように)軍事指揮者であったとしても、当然ながらすべての軍事指揮者が皇帝であるということにはならない。契丹の支配者のように、例え彼らが自分自身を皇帝と呼んだとしても、本当の鍵となるのは、実際に統一した中国を効果的に支配できるかということであった⁶³。この教科書では、宋の建国者と、その弟で父親の古くからの敵を破って天下統一を果たした太宗を大いに称えている。たとえ宋が多少政治的能力に欠けたとしても、それは文化的に重要な時代であったといえる⁶⁴。しかしながら丁は、その外交政策の不首尾や国内の派閥抗争は最終的に元朝への道を開いたものだとまとめている。丁は、モンゴル民族は遊牧民の羊飼いの種族であったことに触れながら、チンギス・ハンの孫のフビライ・ハンがどのように宋を破り、中国王朝を奪ったのか

62. 同上、28～29頁。

63. 同上、37頁。

64. 同上、37～38頁。

を詳しく述べている。丁は、世祖の広域にわたっての征服や、限定的ではあるが、日本への勝利を挙げて、彼が実際どのようにシベリアとインドを除くアジア全土を統一したのかを示した。積極的な交流と接触がすべての党派に利益をもたらしたと主張されている。教科書において、この巨大なモンゴル帝国や元王朝と中国の区別の試みは見られない⁶⁵。おそらくほとんどの生徒が、フビライは単に別の偉大な征服者で皇帝であったと考えただろう。広大なモンゴル帝国は、世祖の死後、最終的に明への道を進むこととなった。利己的なラマの聖職者たちの出現や、モンゴル内部の抗争や元への圧力により、重税や大衆の不満を引き起こすこととなり⁶⁶、結果的に、元はその派閥抗争により崩壊したのである。

教科書において、民族の分裂や一般的な問題は強調されていない。これは、清朝の教育者たちの関心のためだけではなく、丁自身の中国の領土の完全さや政治的中央集権化に対する関心のためであり、驚くべきことではない。もし、元が宋に対する「野蛮人」による脅威であったとしても、元には正統性がある。元の問題は、それが「外国」であったということではなく（教科書では触れられていない）、世祖の王位継承問題がうまく行かなかったことにある。崩壊後の明は、愛国的な「復讐」ではなく、秩序の復活を象徴したものであった。宋・元・明の支配者たちの最終的な試みは中国を防衛する能力にあった一方、理想としては、外部へ開放し、接触し、貿易をすることであった。後に考察するが、丁は同時に中国の歴史的テーマは独立国家という観念的なものであり、「種族」の記述があるにもかかわらず、それは民族や民間人に関するものではないとしている。

丁は、明時代に関して、ヨーロッパ人によってつくられた新しい世界制度への不完全な適応を述べているが、国内問題についても強調している。海賊行為と北方問題に触れて、鞭撻指導者がラマ教に改宗させられた時に、北方からの略奪行為が終わることとなったと述べている⁶⁷。そして、明は、派閥抗争や内乱によって崩壊することになった。教科書では、明の崩壊が満州族によるものだとしていない。同時に、ヌルハチに始まる満州族のリー

65. 同上、47頁。

66. 同上、48頁。

67. 同上、54頁。

ダーたちを、途中、朝鮮を属国とし、明を首尾よく征服した皇帝であったと示した。興味深いことに、丁は、降伏することを拒否した、明の「忠臣」について触れていないのに（宋の忠臣については名指しで記述している）、「反逆者」については記述があるということである。また、清の建国者は別として、康熙帝や乾隆帝は偉大な征服者であり皇帝であるとしている。康熙帝に関しては「三藩の乱」を鎮圧し、台湾を合併し、ロシアとの国境を引き、モンゴル・チベットより西方へ勢力を拡大したことを、乾隆帝に関しては越南を防衛し、朝貢制度を東南アジアにまで広め、新疆や四川の部族を守ったことが称えられている⁶⁸。また、丁はここで、政府制度について比較的詳細に記述している。

実際、大清帝国は明とその周辺諸国を征服したが、それは「中国」を征服したという意味にはならない。丁は、それ以前の記述においてもそうだったように、中国の中心地での闘争の話を自然に避けている。彼が記述することを避けなかったのは、乾隆時代の末期から直面した国内外の問題である。白蓮教徒の乱、アヘン戦争、太平天国（長髪賊）の乱や、起こり続ける外国による侵略はすべて簡潔に述べられている。アヘン戦争による威信の喪失は、太平天国の乱を引き起こした主な要因であるとしている。清の東南アジア、朝鮮、また琉球における宗主権の喪失は、当時の中国自身への外界からの影響と同様に重大なものであった。ロシアの脅威から中央アジアを守ったことや、清仏戦争においては賠償がなかったことなどの、清の勝利、部分的勝利に注目を向けている。しかし、三国干渉があったものの1895年の日本への敗北による朝鮮半島の独立を認めなければいけなかった。この頃から中国に対する列強の干渉が広まったが、これらに関しても一つ一つ詳細に述べられている。

そして光緒帝や西太后の統治に関する記述のないまま、教科書は終わる。20世紀初頭の新政は帝国主義による屈辱と比較されている。教科書の論調はいたって客観的で淡々としているが、教師たちがこれを現実味を帯びたものにさせることができただろう。問題は、生徒たちが、この150年間における明らかな清朝勢力の衰退から、清朝の統治についてどのように考

68. 同上、58頁。

えるべきかである。この教科書の最後の章にある愛国精神についての記述は控えめなものであるが、十分に明確なものである。君主政体は領土防衛において、その帝国機能を活用できていなかった。しかしながら、丁の王朝に対する忠誠は疑いのないものであった（必ずしもそう決め込む必要もないが）。丁は、それまでの教科書に見られたような、粗野で思慮に欠ける清への賛美をうまく避けることができたといえるだろう⁶⁹。ここで重要なのは、丁が何を意図したのかではなく、小学校の生徒たちが何を学ぶべきであり、何を学ぶべきでないかと彼が考えたかである。丁の教科書が強調しているのは、統一という主題で、それは一般的にいう君主政体と、もっぱら清を包含しているといえるだろう。

そして、丁はその序論で述べたように、当時中国が直面していた屈辱に関する記述をうまく成し遂げた。しかしながら、生徒に模範を示すという目標に関してはややぼんやりしたものとなった。聖賢の時代といえる一種の神話的な先秦時代からの帝国像も浮かび上がるが、秦以降の時代における多彩な能力をもった歴史上の皇帝はかなり詳しく描かれている。丁がこの政治的語り口によって生み出されるものに気づいていたかどうかは分からないが、結果として、彼は皇帝政治は軍事征服の手段であると定義している。この教科書には君主政体の正統化や、そのイデオロギー、さらには革命を促すというような試みは見られない。

また、丁の教科書では、天命についてや、他の君主制に関する明確な議論も触れられていない。読者が倫理的な含意を当然のこととして受け止める一方で、統一のテーマは認識されない。分裂よりも統一された中国の方がよいとどうしていえるのだろうか。内乱の苦しみを示す以外、丁の教科書はこれを示していない。統一が絶対的に良いことであると示していない。しかしながら、この教科書の歴史的对象が「中国」である限り、その統一は実在的なものである。したがって、「種族」を守ることが必要なのである。

小学校の教科書から与えられる中国の歴史についての概略からは、教養のある分析や鋭い見識を期待することはできない。また、我々が教室でこ

69. 蔣維喬「創辦初期之商務印書館与中華書局」、張靜盧編『中国現代出版史料』丁編、中華書局、1959年、396頁。

れを他の生徒や教師と一緒に読むという経験を再びすることはできないであろう。丁は、文化の変化（宗教、芸術、学問の発展）についても述べたものの、政治的な内容を教科書に取り入れた。その意味で、「中国」は絶対的に歴史的な主題であり、それは時代を長い目で見ることのできない気まぐれに不平や反逆をする者とは離れた存在である。そして、人々は時には盗賊により打ちのめされたり、時には未来の皇帝と結びつけて考えられたりもするが、決して歴史をつくる役にはなれない。歴史をつくるのは、主に皇帝と政治的指導者たちなのである。

丁や学部の高官たちが望んだように、この教科書は生徒たちの愛国精神を呼び起こす役目をよく果たしたと言えるだろう。しかし、それが伝統的倫理観念や皇帝への忠誠心を助長したかどうかはまた別問題である。

Abstract

Peter Zarrow

Textbooks are designed both to impart knowledge and to socialize the younger generation. They are approved by political or social elites to impart cultural continuity (collective memory and identity) and prepare the younger generation for new challenges. In modern society, educational institutions disseminating new knowledge often challenge existing views. One of the greatest challenges of new knowledge is to traditional “moral knowledge” that, among its other effects, binds together communities of memory. Although officials in the late Qing did not wish to challenge Confucian moral views in any way, they also wished to integrate the new knowledge with traditional moral knowledge. And politically, they sought to shore up the monarchy with “loyalism” (*zhongjun*). However, official desires in the case of the late Qing were in fact contested.

A national educational system was founded in the early twentieth century, and it needed textbooks. The Qing government did not prescribe textbooks but allowed individuals to author them, subject to official approval. Textbook-writers, unlike high officials, might wish to emphasize patriotism at the expense of loyalty to the emperor. Furthermore, the actual content of textbooks did not necessarily represent the conscious intentions of textbook-writers any more than the goals of officials. This paper examines both official views and the development of “self-cultivation” (*xiushen*) in the curriculum. It then goes on to discuss a history textbook, the author of which stated that he wished to instill students with patriotism, the historical theme of the unity of the empire, and the progress of the nation. Yet the textbook itself offered relatively little sense of political or social progress. Its political narrative highlighted the actions of great men, but these actions often had tragic consequences. China’s various historical emperors were military conquerors, not exemplars of virtue. As disseminated in this textbook, historical knowledge lost most of its moral significance and, in effect, collective memory was simultaneously challenged and put on a new footing.